



中里恒子全集

中里恒子全集 第三卷

定価二三〇〇円

昭和五十五年十一月十五日印刷
昭和五十五年十一月二十五日発行

著 者 中里恒子

発行者 高梨 茂

印刷者 青木 勇

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二ノ八ノ七

振替東京二一三四

検印廃止

©一九八〇

目次

良心

卯の花日記

自然児

夕顔

蜘蛛

五月の鐘

睡蓮

緑の風

冬の海

5

21

49

75

97

113

131

139

153

秋	165
資格試験	177
墓地の春	195
犬を愛する奥さんの話	227
晩歌	245
夕牡丹	321
麻利耶観音	339
薔薇	357
世間知らず	371
せせらぎ	387

余
つ
た
命

あ
と
が
き

解
題

439 437 405

良

心

あなたの家の呼鈴がずいぶん暫く壊れたままになっていたことがありました。それについて、私はこんなことからさえも、思いがけずひとを苦しめる場合があることを、是非ともお知らせしなければなりません。

俗に気がとがめるといふことをよく申します。そしてそれは無意識の裡に行われながら、充分その当人を懲らしめるものであって、人間は自分のもっているこういう武器によって、どのくらい痛い鞭を自分自身に当てていることでしょうか。

あなたはこの頃よく御主人の態度を批判したり、非難したりしておいでになりますが、そんなことはどうかならないで下さい。御主人の良心に委せておおきになってごらん下さい。そういうもののまでを不信用になつてしまうことは、あなたの敗北でなくてなんでしょう。

私はこの頃しきりに、そういう殆ど誰にも気づかれずに、或はその人間自身自覚せずに行われてさえいる精神生活に於ける、人間のあらゆる攻撃と守備とをいたましく思わないではいられません。

性懲りもない過ちや、わるいことをする人間の方に深い良心があって、後悔するようなことは

何一つしないという立派な人間に、却って良心がないというのは乱暴でしょうか。

けれども私自身内省してみる場合、良心というものは、よいことをしているときには眠っているのだとおもいます。それが必要なときには、ひとりでに活動し始めることは確かなのです。どうかこういうお気持ちになって、静かにしていまして下さい。

それについて、極くありふれたこと柄ですけれど、それだけに私が興味をもって聴いた挿話を次に書いてみました。全く良心というものは、人間に与えられた苦しみの中で最も困難なものなのかもしれません。

自分ひとりだけが苦しがつてでもいるかのように、私たちはともすれば少しばかりの智慧にいい気になって深刻がったりしたがるものですが、そんなことは容易です。

ふたことめには、自覚だの高邁な精神だのとふりまわして、それだけでひとかどの思想でも有しているように、謙遜なやさしい心を壊してしまうのも愚かではありませんか。

あなたはそんな厭な女にならないで下さい。そして、なんでもない小さなことにも人生の相を見遁さないで欲しいものです。ほんとに特別なことだけが人生ではないのです。

いま、私は旅立つところです。

私のこの話があなたの現在に少しも関係がないのにもかかわらず、私はなんだかこんな日常経験しがちな気持の中に、あなたが或る実感をおもちになるような気がしてなりません。……

私が帰ってくるまでには、やっと咲き残っている山茶花もすっかり散りつくしてしまうことでしょう。きょうは生温かいひどい南風が吹いています。ひと枝をこの文に添えて

十一月十四日

……そこからなるべく落着いてゆっくり坂を登りつめると、山手八十七番街の大通りへ出る。しかし彼がそんなに注意ぶかく歩いたのにもかかわらず、だんだん彼は上気していた。あの西洋館の角を曲ればすぐ彼女の家だ。こんなに突然に自分のたずねてきたことをどんなにびっくりして迎えるであろう。彼女のびっくりした時の大きく凝視する眼つきや、怒ったようにつんとした頬などがありありと予想しながら、そういう場合にも自分は至極平静でいなければならぬ、彼女に會うということが自分をこんなにわくわくさせている理由を、まだ彼女に知られるのは少し困るからであった。

やがて道を曲ると野菜の車が停っていて、西洋館の老いたアマがキャベツやアカカブを選っていた。彼はすぐ彼女の家の温かい部屋やびかびかに光った食器などを考えて、もしかしたら彼女も芹ぐらい買ったかもしれない。そしてきょうもひとりで、ベーコンといっしょにいためた芹と半べんぐらいで昼の食事をすることにきめているだろう。そこへ、自分が落着いてたずねていて驚かしてやるのだと、すっかり予想の世界を作り出していた。仲なかたのしい思いつきである。彼はそれなのにたのしくもなんともないような顔つきで這入ってゆかなければならない自分の位置をふしあわせにも思った。

とうとう彼女の家の前へきて、小さな曲った段段を四つ登り、冷めたい石の壁にとりつけてあ

る黒子のような呼鈴を軽く押した。そして彼は外套のボタンなんぞをいじりながら手應えを待っていた。

前庭の植込みのなかでばさばさっと小鳥らしいもののあばれる音がした。彼はそっちを振りむいて待遠しいのを我慢していた。今にもガタンと扉が音をたてて開き、のぼせあがったことのないような彼女の淑やかな姿があらわれるだろうと思ひながら。……風が吹いてきて一本の古い桜の木から葉をふるい落し始めた。乾いた葉っぱはたはずんでいる彼の肩にも落ちてきた。彼はいそいで今一度呼鈴を押した。こんどはぎゅっと力を入れて。それから今度こそは間違ひはない確信をもって待った、しかし仲間な扉は開かない。彼は腹立たしいような、こんなにも遠慮ぶかくなっている自分の氣もしらずに、度たび呼鈴を鳴らさなければきこえないほど、いったい彼女はなんの用事をしているのかしら、是非とも怒ってやらなければならぬ、こういう氣持で、折角先刻まで自分の用意してきた沈着だの冷静だのという感情が、みだされてゆくのに一層いらいらしていたのである。

そのうち彼女の門の前を小学校の生徒たちが二、三人ずつ、五、六人ずつひとかたまりになって道の辺の石を蹴ったりランドセルをゆすぶったりしながら通りかかっていた。上天気で往来は美しく光っている。彼はいつまでもそんな風にして自分だけが玄關の前にたたずんでいるわけにゆかないような氣がして、こつこつと靴の音をたてながら前庭のあたりを歩いたりし出した。そのうちに彼女が聴きつけて窓をあけるだろう、それとも、丁度着替えでもしていて簡単に顔が出せないのかもしれない、僕と同じように訪客のことを気にしながらも。もしそうならばいい

んですよ、ほら僕はそれが済むまでこうやって待っていますから、大丈夫、怒って帰ったりしはいたしませんよ。……こんなことまで考えて彼は暫く待っていた。

そのうちに今はもう彼もそう面白い方にはばかり解釈をするわけにはゆかなくなってきたのである。そして一旦悪い方へ気をまわし出すと、制めることが出来ないほどの速力をもって、あらゆるしあわせでない想像が働き出した。あれだけ何回も呼鈴を押して聴えないという法はない、彼女の家は階下の客間と居間と大きな日光室と寒い台所と、階上の寝室と衣裳室だけではないか、たいして広くもない家のなかではどの部屋にいたところでわからない筈はないのだ。それともミシンでもかけているというのだろうかしら。そうだ、ミシンならばひょっとすると——ふところ思いつくと、彼はそうに違いないような気がして、急に彼女がガラガラと強い音をたてながら毛布のカヴァでも縫っているような気がして、いそいで以前よりもずっと力を籠めて呼鈴を押し通した。指を離さずにぎゅっと抑えていた。幾らなんでも今度は通じたらう、注意深い彼女のことだから、ミシンの機械の音と呼鈴の音とを聴きまちがえる筈はないであらう。そう思って、半分怒りかけていた上氣した頬をなんとなくさわってみたりしながら待った。しかし、やっぱり室内からはなんの應えもないのである。

彼はたまたまなくなつてすぐ玄関の前を離れた。もうこれ以上こういう氣がかりな状態を続けてゆく我慢がなくなつたのである。いっそ庭先から部屋の方へまわってみようかしら、その為には彼女が自分の無様を怒つたとしてもかまうものではない。こういう氣持で彼はいそいで植込みの中を通過して家の裏側にまわった。虹のような葉鶏頭が群生しているそばに、子供の新しい靴下が何

足も干してあった。

彼はぎょっとした気持でその場にたたずみ、すっかり忘れきっていた寄宿舎にはいつているという彼女の男の子の様子などを考え出した。そしてその僅かばかりの凝視の時間に、自分の家のいつも賑かすぎる客間や、流行のことだけで頭がいっぱいになっているような性格のあわない派手な妻の笑顔が、この静かな、裏庭にまでひろがっている彼女の生活とは、まるで似ても似つかないのを感じさせられた。こんな風に彼女はたった一人でもしあわせに暮していられるのだ、日当りのいい部屋で子供に送る靴下なんぞを編みながら。それなのに自分だけがのぼせあがっているのはみっともないことである。彼女は不意に自分が訪れることなんぞそう喜ばもしないだろうし、そうびっくりもしないだろう。だいたい彼女にびっくりされようと思うのが少しのぼせているしるしかもしれぬ。呼鈴の通じなかったことはまことに都合だ、このまま自分が戻ってしまえば彼女はこうやってそわそわして自分の訪ねてきたことを知るまいだろうし、自分も従前通りなんでもない顔つきで財産整理の相談などに應じることが出来るのである。彼女の最も信頼する一法律家、それだけでいいのだ。——彼はまたいそいで裏庭から出ていった。

往来をたくましい犬が駆けていった。

彼は妻には今日は一日中或る訴訟事件で多忙だという理由で外出したのである。

「あたくしも午後には町へ買物に出ますから三時頃事務所へ電話しますよ、お茶でもいいかが

……」

「だめだ今日は、事務所には殆どいないだろう、」

出がけに妻ととり交わしたこんな會話を思い出して、彼はこのまま家へ帰ることも不自然なもので、ともかく日当りのいい大通りをひどく多忙そうに歩いていった。ぞくぞくと小学校の生徒に會った。こんな元氣な林檎の香のするような可愛いものを彼の家庭はもっていないのだ。それに比べて、先刻の彼女の家のあの落着いたいかにも静かな暮しよりは到底良人のない侘びしげな家庭には見えないではないか、裏庭に子供の靴下をいっぱい干してあたたかい毛の匂いを立てたりして——彼はひどく羨しい氣がした。どんな贅沢をしてみてもあれほど自分の家庭は安心して落着くことは出来ないような氣がする、女には子供をあてがっておけば好いと言うけれどそうかもしれない。そんなことを考えながら彼はやっと事務所まで戻ってきた。

暫くの間、彼が書類に眼を通したり事件の報告をきいたりしていると、そこへ電話がかかってきた。

「奥さまからのようです、」

彼は氣むずかしい顔をして電話に出た、そして朝妻に言いおいた言葉なんぞ忘れて、ひどく簡単に妻の申し出を承知した。山手八十七番街の某邸で家具の売立てがあるのに誘われてきたが、自分にも欲しいものが三つほどある、それを買ってもいいかどうか見にきて欲しいと言うのであった。

八十七番街、八十七番街と云えば彼女の家の近處ではないかしら、もしかしたら彼女にばった

り坂の上などで出會うかもしれない、土曜日だから寄宿舎から遊びにきている男の子と散歩ぐらいはしているだろう。そんなことも彼の外出をうながしていたのである。

それから彼は事務を整理すると、行先を秘書に告げて約束の場所へ向った。その家は彼女の家から数軒さきの、病院のうしろの大きい邸である。堂堂たる玄関へ彼がはいってゆくと、妻が妻の友人夫婦と出てきてすぐ部屋へ彼をひっぱっていった。

「これなのよ、落ちるかどうかわかりませんがどうかでしうかしら、」

「うん、」

彼は暫くその小さな吊戸棚を眺めていた。だいぶ古びた先ず十九世紀と言いたげな趣きをした彫刻のある素朴な棚で、居間の壁に架けたら引立ちそうな道具だ。それから同じように彫刻のほどこされた大きな椅子二脚、その一つは脚ががたがたしている。それから食堂へ置く三角の大きなサイドボード、その上には真鍮の金具の惜しげなく使われている美しい洋酒入れと小さな三面鏡が置いてあって、古風な鏡の前には鉄の蠟燭立てや木彫のパイプ架なんぞが並んでいた。彼はなんとなく妻に優しくしたいような気持ちであふれていたのだ、妻の目をつけた家具たちは全部適当な自分の評価より幾分いい値を入れた。友人夫婦は敷物に値を入れていた。室内はあまり人相のよくない商売人や、商売人の連れてきたお客や、素見半分のものずきな人びとで混雑している。売物の椅子の上でながながと病気の報告をしている奥さんもいた。ヴェランダの寝椅子に毛並の光った犬が乗っている。

「おや、この犬も売りもの？」